

A la Recherche du Temps perdu における日常性の変容

— そのサディスムまでの考察 —

青 柳 り さ

1953年、Lester Mansfield は、*Le Comique de Marcel Proust*¹⁾ においてすでに、人々が Proust の作品を難解でわかりにくいエリートのためのものと勘違いし、小説としての面白さを見落とす恐れが生じつつあることを指摘し²⁾、また、*la Recherche* は、作品の深遠さ、思想、知的着想、表現の豊富さによって際立っていることは勿論であるが、更に、人を楽しませてくれる作品としても読みごたえのあるものである³⁾、と述べている。

その原因に日常性の特異な描写力がある。例えば、Proust は作品の中で、人々が心の内で感じていること、口に出すまでもない、むしろ当たり前のこととして口を噤んでいることを綿々と書き綴る。読者には心当たりがある。このような「心当たり」で以て、読者は Proust の増幅された日常性描写に、一種の共感を持つことになる。彼の描く人物は確かに面白いのである。

彼は、ある使命を帯びた典型的人物というものを描かず⁴⁾、日常ありふれた人間をあるがままに、つくらず、選択せず、決定を下さず、彼の目に映ったままに詳細に描く。André Maurois は、Pléiade 版の序文の中で、これを「素材選択への無関心 (son indifférence au choix des matériaux)⁵⁾」と呼び、Proust の独創性として扱っている。このような一見無関心とも受け取れる姿勢を生み出し、その姿勢を著作と深く結びつけているものについて、Maurois

は次のように説明する。

彼 (Proust) はいくつかの特徴によって著作に運命づけられている。気質からいって、彼は神経質で病的に敏感である。素晴らしいがまた盲目的愛情を抱く母親に育まれた彼は、ほんの僅かな不調和の陰影にも苦しみ、反感あるいは嘲笑のごくかすかな波動をも苦痛をもって記録する。もっと硬い甲殻をきた他の人なら誰も、いつまでも跡形を残すようなことのなかった場面が、彼の精神にとどまって、まるで救いを求める地獄にある魂のように彼につきまとう。「作家は精いっぱい運命の何らかの不公平の償いをつける」 プルーストは埋め合せや釈明や慰めの切迫した要求を感じている⁽⁶⁾。

彼のこの *sensibilité*こそが、彼を人並みとはかけ離れた力で著作に結びつける。彼の *sensibilité* というフィルターを通す時、日常の光景が文学的素材となる。

この論文の目的は、作品の中にとり込まれている微細なまでの日常生活が、いかにして banal な日常性から変容しているかということ、彼の *sensibilité* という観点から分析することであり、更に、ストイシズム、そして日常的現実とは結び付き難く見えるサディズムというものが、実は、彼においては、日常性の延長上に生じるべくして生じたものであることを明らかにしていくことである。

注

- (1) Mansfield, Lester., *Le Comique de Marcel Proust*, Paris, Nizet, 1953.
- (2) Ibid., p. 10.
- (3) Ibid., p. 11.
- (4) Cf. Proust, M., *Contre Sainte-Beuve*, Pléiade, Paris, Gallimard, 1971. *Romain Rolland*, pp. 307-10.
- (5) Proust, M., *A la Recherche du Temps perdu*, 3vol, Pléiade, Paris, Gallimard, 1954, tome I, *Préface* par A. Maurois, p. IX.
- (6) Ibid., p. X.

1-1 残酷な光景

日常の光景は、話者の *sensibilité* というフィルターを通して描かれており、その描写に一種のパターンを認めることができる。ところで、作品中、日常性が最も顕著に表れているのは、些細な意地悪や、突然表面化する残酷さの描写の中にある。従って、この章では、人間の残酷さを取り扱った四つの場面（この場面ではまた、エゴイズム、言い訳、時としてユーモアが表れる）について考察する。

I. ヴェルデュラン夫人がシェルバトフ大公妃の死を知る場面（Ⅲ, pp. 238-40.）。

場面はヴェルデュラン夫人が主催する夜会である。夫人は、彼女のサロンの常連であり、親しい友人であるシェルバトフ大公妃の危篤、次いで死の知らせを受けとる。夫人は、自分が悲しみなど微塵も感じていないこと、従って会を取り消す理由などないことを宣言する。この夫人の大胆な発言によって、会は事なく進行する。

言葉の過激さ（人の死に対する無関心の宣言）にもかかわらず、夫人の発言は、実際には何も起こさない。社交界における「穏やかさへの志向」とでもいうべきものが、そこに居る人々に咄嗟に働いている。しかし更にもう一言、作者は付け加えないではいられない。即ち、常連達の心に残ったこだわり、戸惑い、割り切れない思いを、作者は推察し、書き留めるのである。

類するエピソードが、スワンのもとですでに発生している。そしてスワンを語る時、話者の洞察は一層深まっている。

II. スワンがゲルマント公爵夫人に自らの死を予告する場面（II, pp. 578-97.）。

作品前半部の白眉とも目されるこの場面で、読者は、*Les Plaisirs et les Jours* の中の中編、*La Mort de Bardassare Silvande* に見られたのと同じのテーマが幾重にも繰り返されていくことに気付く。それはまず、ゲルマント公爵が瀕死のいとこの状態を無視することに始まり、ゲルマント公爵夫人とスワンとに引き継がれる。社交の楽しみと瀕死の人の思いとが天秤にかけられ、社交の楽しみの方が重きをなすのである。

数ヶ月後に自らの死を予感したスワンが、敬愛するゲルマント公爵夫人を訪問し、ふと自分の近い死を漏らす。公爵夫人は今、夜会に出かけようとしている。

「何をおっしゃるの」と公爵夫人は馬車の方へ進む足をちょっと止め、青く憂鬱な、そして不安に満ちた美しい目を上げて叫んだ。外へ食事をしに行くために馬車に乗ることと、瀕死の人に同情を示すこと、こうも違う二つの義務に生まれて初めて板挟みになった夫人は、見習うべき判例を示してくれる儀礼集の中に何一つ見つけることができず、いずれを優先すべきかに迷って、今の場合、少ない努力ですむ第一の義務に従うために、第二の義務が課せられていることを信じないふうを装わねばならないと考え、この板挟みを解決する最良の策は、板挟みの存在を否認することだと考えた。

「ご冗談でしょう」と夫人はスワンに言った。

スワンの言葉に一瞬、悲しみが見える。「冗談とすればいい趣味の冗談です」しかし彼は即座に社交人としての自分を取り戻す。

「(…)でもご遅刻になってはいけません。お出かけ下さい」と彼は言いたした。他人にとっては、自分自身の社交的義務の方が知人の死よりも大切なことを心得ていたし、儀礼上、彼は相手の身になって考えていたからである。しかし公爵夫人も、儀礼の上で、自分の出かけて行く晩餐会が、スワンにとっては彼自身の死ほど重大でないことに漠然と気づいていた。そこで馬車の方へ歩みを続けながら、夫人は肩を落として言った。「晩餐会なんかいいのよ。どうでもいいことなんだから！」ところがこの言葉を聞くと、公爵は機嫌を損ねて叫んだ。（II, pp. 595-96.）

夫人は公爵の言葉に従うことになる。一見したところ公爵が全ての決定権を握

っているかに見える。ところが読者は公爵を見ていない。

視線は公爵夫人に注がれている。スワンの死の予告を耳にした夫人は「青く憂鬱な、そして不安に満ちた美しい目を上げて」叫ぶ。ここに読者は、公爵夫人の美しさと、その自分の美しさを十分に意識しているであろう夫人の存在を、あるいはその美しさを見逃さない作者の視線を感じとる。親しい友人の間近な死を耳にしながら、女は自分の美しさに磨きをかけている。更に、晩餐会などどうでもいいことだと言いながら、馬車の方へ足を進める公爵夫人が描かれている。

最も残酷なのは公爵のはずである。しかし読者は公爵夫人に目を向け、思いやりを期待し、そうでない夫人を残酷だと感じる。描かれているのは、もはや公爵のエゴイズムではなく、美しい公爵夫人のエゴイズムであり、そのような夫人の立場を容認しているスワンの姿である。痛みを感じながらもそれを潜在的状態のままにしてしまう二人の人物である。

Les Plaisirs et les Jours において見られたエゴイズムのテーマは、*la Recherche* において大きく膨らみ、また変質している。エゴイズムは公爵と公爵夫人に認められるが、作者はむしろここで、公爵夫人とスワンの心に潜在する痛みを凝視しているのである。こうして「ゲルマント公爵夫人と赤い靴」のエピソードが続いて語られることになる。晩餐会をとるか、スワンをとるか。そして靴をとるか、スワンをとるか。対照は更に際立ち、社交人が描かれる。

晩餐会の時間を気にして慌ただしくスワンに別れを告げた夫人は、黒い靴を履いている。赤いドレスには赤い靴の方が「粋」とあるという理由から、公爵は夫人に靴を履き替えに戻らせる。夫人はスワンの手前を気にしながらも、自らの利己主義を容れて公爵の言葉に従う。ここでもやはり、その残酷さに気付かない振りをする夫人と、その残酷さを容認するスワンとが描かれている。

潜在する痛みは、しかし決して消え去ってしまうことはない。《*Sodome et*

《Gomorrhe》の章を隔て、《La Prisonnière》の中で、再びこの靴が話題に上る。

すでにスワンは死んでいる。話者はゲルマント公爵夫人に嘗ての晩餐会の赤いドレスを着る。「あなたは真っ赤なドレスに赤い靴を履いていらっしやいました(Ⅲ, p. 37.)」しかし夫人は「金色の靴」だと言い張る。そう思い込んでいる。夫人の心からあの「赤い靴」は消え去り、話者の心には根を張るように残っている。

あるいは夫人は、思い出したくない一つの事件を自らの記憶から消し去ったのかもしれない。が、いずれにせよ夫人は忘れ去り、話者は忘れられず、再びそのこだわりを書き留める(Ⅲ, p. 38.)のである。

Ⅲ. コンブレで、大叔母が祖父に禁物のリキュールを飲ませて祖母をからかう場面。

かわいそうに祖母は部屋に入ってきて、夫にコニャックを飲まぬよう懇願する。祖父は苦りきるが思い切ってぐっと飲み干す。祖母は悲しそうに、落胆して、しかしほほ笑いながら再び出て行く。(…) こういうことは当時の私にひどい嫌悪感を与え、大叔母をぶちのめしてやりたかった。しかし、「バチルド! とめにいらっしやい。旦那様がコニャックを召し上がりますよ!」を耳にすると、卑怯の点ですでに大人であった私は、我々の全てがひとたび大人になったが最後、眼前に悲痛なもの、不正なものを見せつけられる時によくやるあの手を使った。つまり見ようとしなかったのだ。私は家のてっぺんに上り、屋根裏の勉強部屋の脇の小部屋で涙に咽んだ。

(Ⅰ, pp. 11-12.)

日常の些細な意地悪が、話者にはひどく残酷なものに思え、といてそれに抗することもできず、話者は目をそらし、逃げ出し、涙に咽び、そしてこの出来事を、自分の卑怯さをも含めて書き留めている。ところでこのエピソードの後半部では、中心はもはや大叔母でも祖母でもなく、話者の卑怯さと話者の悲しみという極めて個人的な問題にすり替わっていることにも留意しておきた

い。

IV. コンプレで、フランソワーズが若鶏の首を絞める場面（残酷であると同時にユーモラスでもある⁽¹⁾）。

（…）私が下におりた時、彼女（フランソワーズ）は、鶏舎に面した下台所で若鶏を絞めている最中で、耳の付根から首をおとそうと懸命にやっているのだが、当然鶏は死物狂いではたばたやるところへ、「こん畜生！ こん畜生！」という思わず出る彼女の叫び声に加わる始末で、鶏は私達の召使いの聖なる優しさや熱情をいさかかぼやけさせてしまった。（…）鶏が死ぬと、フランソワーズは血を集めるのだが、その血が恨みがましく流れるので、またしても怒りにかられて、敵の屍を見つめながら、これを最後ともう一度「こん畜生！」と言うのだ。私はがたがた震えながら階上に戻った。すぐにもフランスソワーズに暇を出してほしかった。だが、一体誰が私に、あの熱々の湯たんぼを、あの香ばしいコーヒーを、それにああした若鶏の料理までをつくってくれるだろう。実のところ、こうした卑怯な計算は、私と同様、誰もががしなくてはならなかったのだ。（1, pp. 121-22.）

女中が鶏を殺して料理するという日常の光景が生き生きと描かれ、Proust の表現の正確さ、素朴な写実が、フランソワーズの残酷さを際立たせている。

《Sale bête!》というひどく卑俗な言葉が、場面に個性を与え、ユーモアを与えている。更に「だが、一体誰が私に、あの熱々の湯たんぼを、あの香ばしいコーヒーを…… ああした若鶏の料理までをつくってくれるだろう（…）こうした卑怯な計算は、私と同様、誰もががしなくてはならなかったのだ」という、余りにも言い訳としか言いようのない言い訳もユーモラスである。

Michel Raimond は、この場面を採り上げ、時間が経ち、推敲が繰り返されることによって、場面の残酷さは遠いものとなり、薄れ、そしてむしろユーモラスな場面となったのではないかと⁽²⁾、と述べている。

「がたがた震えながら階上に戻った」話者に、その時、言い訳はあってもユーモアがあったはずがない。このユーモアの要素は、ありとすれば、作者が後

から加えたものである。しかし、このようなユーモアが加わった（このようなユーモアを加えた）ことは、一体何を意味しているのか？

Jean Santeuil の冒頭部分に、C という作家が、鷺鳥を海に追い散らし、溺れさせて楽しんでいる光景がある⁽⁹⁾。これは「フランソワーズと鶏」のエピソードの原型ともいえる。作家Cの不可解な行動と残酷さは、フランソワーズという人物を採ることによって日常化され、彼の不気味な楽しみは、彼女の粗野な言葉と興奮とによってユーモアで包まれることになる。更にここに、何も成し得ない話者の言い訳が長々と書き加えられていくのである。

続いて、*la Recherche* では、フランソワーズが下女中を追い出してしまうエピソードが語られる⁽¹⁰⁾。

フランソワーズは、同僚を主家に居つきにくくしようという不断の意志にそうために、いかにも熟練した無慈悲な策略を弄したもので、あの年の夏、私達がほとんど毎日のようにアスパラガスを食べたのも、ずっと後になって私達は知ったのだが、このアスパラガスの匂いが、その皮をむくことを仰せつかった下女中に、ひどい喘息の発作を起こさせるからなのであって、この女中はとうとうそのために、暇をとって出て行かなくてはならなかったのである。（I, p. 124.）

やはり「知らなかった」から仕方がなかったという事実を話者は書き留めるのである。

彼の「書き留める」という行為によってなされていることで、ここでもう一度確認しておきたいことは、1. ありふれた日常の光景の中から残酷さが浮き彫りにされていること。2. 事件の描写と同じ、あるいはそれ以上の比重をもって「知らない振りをした」こと、「知らなかった」ことの言い訳が書き留められていること、3. 各々の事件が決して大事に至らないことが記されていること、である。

1-2 書き留めるということについて

Jean-Pierre Richard は、書き留めるという行為に《vengeur》としての役割をみている⁽⁶⁾。Michel Raimond もこれを受けて《Triangle capital: bourreau, victime, vengeur》を採用し、IIIのシーン（大叔母が祖父にコニャックを飲ませて祖母をからかう場面）を bourreau — 祖母をからかう大叔母, victime — 祖母, vengeur — 後になってそれを書き留める話者、とする図式化を Proust, romancier, 1984. の中で引用している⁽⁶⁾。これは Maurois が *la Recherche* の序文で述べた「作家は精いっぱい運命の何らかの不公平の償いをつける」という言葉とも通じるものである。

ところで、復讐の要素は大いにある。しかし、復讐のテーマはむしろ前作 *Jean Santeuil* において大きな位置を占めている。《*La Vie mondaine de Jean*⁽⁷⁾》の章の3分の2は、社交界においてジャンの受けた侮辱と名誉回復（復讐）をテーマとしている。これに対し、*la Recherche* で復讐の要素が最も顕著に表れているのは、ヴェルデュラン家の晩餐会で、モレルに裏切られ、ヴェルデュラン夫人に侮辱され、意気消沈し途方に暮れているシャルリュス氏に、ナポリ女王が腕をさし出し、彼女が毅然としてヴェルデュラン夫人をはねつける場面（III, pp. 319-22.）である。しかしこの場面はドラマティックであるとはいえるが、復讐は何ら解決策とはなっていない。ここではもはや復讐は目的とはいえず、むしろこの復讐によって引き起こされるドラマティックな効果の方が目をひく。

1-1 で採り上げた四つの場面も、残酷さを描きながら、あるいは話者の sensibilité によって残酷さを浮き彫りにしていきながらも、他人事^{ひとごと}として描かれる、言い訳を伴う、という形で、同時に別の要素（抑制という効果⁽⁸⁾）が働

いている。sensibilité による自己防御がその根底にあることは確かである。しかしこの防御の姿勢ゆえに加わったユーモア、緊張感へと作者一読者の視点は移っているのである。社交界における「穏やかさへの志向」は、スワンにおいて「ストイシズム」として現れ、これは緊張した美しさを感じさせる。そしてまた「穏やかな(《C'est doux.》)といえるものでなければ決して書かない(Ⅱ, p. 557.)」というベルゴットの芸術への姿勢とも連動し、一種張りつめた美の世界を構築しているのである。

注

- (1) Raimond, Michel., *Proust, romancier*, Paris, C. D. U et SEDES, 1984. pp. 152-54.
- (2) Raimond, M., *La Cruauté chez Marcel Proust*, Conférence, 1982.
- (3) Proust, M., *Jean Santeuil*, Pléiade, Paris, Gallimard, 1971. p. 187.
- (4) «tragédies d'arrière-cuisine» と呼ばれるシーンの1つである。
- (5) *Études proustiennes I*, Gallimard, 1973.
- (6) Raimond, M., Op. cit., p. 151.
- (7) Proust, M., Op. cit., «La Vie mondaine de Jean» pp. 660-707. の章の pp. 679-707.
- (8) 或は「客観性」

2-1 装われた無関心

これまで採り上げた場面では、必ずしも直接に「無関心」に当たる語は用いられていないが、作品中、indifférence 系統の単語が使われている箇所は338箇所¹⁾、その内「装われた無関心⁽⁶⁾」という意味でこの単語が用いられているのは57箇所¹⁾に上る。この「装われた無関心」によって成されることは「自己防御」である。登場人物達に無意識的に働く防衛のメカニズムについては、René Girard が *Mensonge romantique et Vérité romanesque*, 1961⁽⁶⁾。において分

析している。Girard は更に、話者によってこの無意識的な防衛のメカニズムが時折意識されていること、作家がこの防衛のメカニズムについて書き留めていることを指摘している。

ところで、意識的に無関心になる、無関心を装うとは、対象と自分とを引き離すことである。引き離された距離、間接性が、自己を守る手段となる。無意識的に働いていたこの防衛のメカニズムを話者は自らの生き方に意識的に利用している。

では何から自己を守っているのか？——自分の外の世界からである。何故外の世界から身を守らねばならないのか？——彼が外の世界と接する時、あらゆるものが cruel に感じられるからである。何故彼においてそれ程 cruel に感じられるのか？——彼があらゆるものに苦しい程に sensible に反応するから、彼が余りに sensible だからである。彼の sensibilité とはそれでは何か？——それは幼児のもつ無防備性であるともいえよう。Jérôme-Antoine Rony は、*Les Passions*⁽⁴⁾ の中で、この状態を「世界と人間の分離する状態がまだ起こっていない幼児期⁽⁵⁾」と呼ぶ。

この幼児の魂は「装われた無関心」によって本能的に身を守る。では Proust にとって「無関心」とはいかなるものであったのか。初期短編 *L'Indifférent*⁽⁶⁾ の存在は、この indifférence というものが、Proust の中で早い時期から重要な位置を占めていたことを示している。

作品では、美しい女主人公と、彼女が恋する、彼女に対して全く無関心な、そして彼女にとって把え難い魅力をもった男とが描かれる。男は旅立ち、彼女は手紙を書き、二年経ち、彼女は結婚し、幸福になり、忘れてしまう。人と人とを分かち絶対的な無関心がむき出しのままに描かれている。

この「無関心」について、Proust は《Du Côté de chez Swann》の中で次のように語っている。

(…) 人々の招く不幸に対するあの無関心、それはたとえどんな名前をつけようとも、残酷というものの恐ろしくも常住の姿なのだ。(I, p. 165.)

人の心の内にある他者の心に対する最終的な無関心、話者にはこれが耐え難い。しかし、ゲルマント公爵の如き絶対的無関心は痛みなど感じない。話者はこの無関心を逆手に取り、この無関心で身を守ろうとする。

登場人物達は「愛している」と言う代わりに「無関心を装う」。これは相手の気を惹く態度であると同時に「守りの姿勢」でもある。装うことによって自らを守っている。また、Proust の描く愛の最も完璧な姿が「アルベルチヌの眠り(Ⅲ, pp. 69-75.)」、即ち、アルベルチヌが人でなくなっている状態(「事実彼女は草花だった(Ⅲ, p. 70.)」)であること、つまり、愛において究極的に求めているものが、安堵・鎮静であることが「守りの姿勢」を証明している。更に「ジルベルトの時のように、私の愛しているのは彼女、アルベルチヌだ、とうっかり口を滑らすような不用心(もしそれが不用心だとしたら)を私は避けた(Ⅱ, p. 1123.)」と言ってはいるが、話者がアルベルチヌに愛を告白する場面など実際はどこにも描かれていないし、アルベルチヌに向かって、「僕が君を愛していた頃…(Ⅲ, p. 343.)」という言葉はあるが、やはり話者がアルベルチヌに愛を告白する場面もどこにもないのである。話者は、サン・ルーとラシェルとの関係や、スワンとオデットとの関係から「ひとたび自分が愛するようになると愛されなくなる(Ⅱ, p. 1123.)」ことを学ぶわけだが、この二つの関係においても、愛の告白の場面を認めることはできず、唯、後になって予測されるだけである。愛する人に向かって「愛している」と言う場面は、この膨大な作品中、実に一箇所も描かれていないことをあえて指摘してもよいであろう。

作品にドラマティックな場面が少ないことは前章の考察からも明らかであるが、残酷さとやり切れない思いを微細なまでに書き綴らせた彼の sensibilité

は、恋愛においてもまた、徹底的に「守りの姿勢」を貫き、終始、愛の不毛な世界を確立している。しかし、実生活においては負の要素としかならないものが、見事に作品の特長となり得るのである⁽⁹⁾。作品中、最も美しい場面の一つ、最も美しい描写で愛する人を描いている場面として、やはり「アルベルチースの眠り」の場面が思い起こされるのである。ここで求められているものが、先述の如く、安堵・鎮静であることも、描写の美しさを損うものではない。それでもやはり、一つの完成した美を感じさせているのである。

2-2 サディズム

Proust は痛みを無関心という手段で潜在的状態にしていく術を心得ていた。これを第二章で「ストイシズム」と呼んだわけだが、しかし一方で、この痛みは彼の内で「サディズム」として昇華されている。彼の極度の *sensibilité* は、恋愛に見出すことのできなかった快楽を「サディズム」の中に見出している。

ヴェルデュラン夫人のサロンで、サニエットの排斥にオデットが瞳を輝かせたのは、排斥の推進者フォルシュヴィルに強い同意を示しているからだけではない、オデットは確かに状況の残酷さを楽しんでいる (I, pp. 266-67.)。同僚を追い出してしまうフランソワーズもサディスティックである。祖母の悲しみを楽しむ大叔母の描写にも、新人女優を失脚させるラシエルらの描写 (II, pp. 173-74.) にもサディズムが感じられる。人の痛みが楽しめるのは、人の痛みがわかるからである。

恋愛において、このサディズムは端的に現れる。話者とアルベルチース、スワンとオデット、サン・ルーとラシエル。女達は、自分を愛する男達の苦しみを見透かしている。自分を愛している人の心の中に、自分故の苦しみが生じるのを平気な顔で楽しんでいる。相手の苦しみに彼女達が無関心であったなら、

おそらく彼女達は相手を嫉妬や焦燥や不安で苦しめたりはしなかったであろう。Proust は、このような愛の形を得意として描くのである。

話者は、娘のためにのみ生き、娘についての悲しみの余りに死んだともいえる父親の写真に、友達をして唾させ、その写真の前で同性愛に耽るヴァントゥイユ嬢について「もしヴァントゥイユ氏があの場に居合わせたとしても、おそらくは娘の善良な心に信を置かなくなるようなことはなかったであろうし、そのことについては、全く誤りというわけではなかったであろう (I, p. 163.)」と考える。何故なら、話者にとってサディストとは、悪人とは全くかけ離れた存在であり、ヴァントゥイユ氏は、おそらく自分の娘への愛情から、直感的にそのことを知っていたらろうと考えるからである。

(…) ヴァントゥイユ嬢の心の中では、悪も少なくとも初めの間は、混じり気のないものではなかった。彼女のようなサディストは、正に悪の芸術家であって、これは根っからの悪人にはとてもなれないものである。それというのも、悪人には、悪は自分の外にあるものではあり得ないだろうし、ごく自然なものとして、自分と切り離して考えることもできないようなものだからだ。それに、美德とか、故人の思い出とか、子供としての愛情とか、そういったものを敬う気持ちなど、そのような悪人は少しも持ち合わせていないのだから、そういったものを冒瀆するという瀆聖の悦楽を味わうことすらできないのである。ところが、ヴァントゥイユ嬢のようなサディストは、純粹に感傷的な人間で、生まれつき美德の持ち主だから、官能の悦楽ですら、彼女には何かしら悪いもの、よこしまな人間にしか味わえないものと思えるのだ。従って、彼女がそのような悦楽に一時的に身を委ねる時にも、よこしまな人間の内部に自分も入り込み、またその相手をも入り込ませようとするのであり、しかもそれは、^{いつとき}一時でも自分の優しい小心の魂から逃れ出て、悦楽の非情の世界に紛れ込むという錯覚を自分のものにしたためたためなのである。(I, pp. 163-64.)

ヴァントゥイユ嬢によってサディズムを語ったこの場面の原型を *Les Plaisirs et les Jours* の中のコント *La Confession d'une jeune fille* の中に、また、Proust が Henri Van Blarenberghe の母親殺しに関して *Le Figaro* に寄せた投稿記事の中に認めることができる。*La Confession d'une jeune fille*

の中で Proust は、快楽に身を委ねる娘とそれを目にした驚きの余り息をひきとってしまう母親を描き、*Sentiments Filiaux d'un Parricide*⁽⁹⁾ では母親殺しの息子を弁護している。この罪の娘と母親殺しの息子、ヴァントゥイユ嬢、マルセル・ブルーストは同一線上に並ぶ。同性愛で、無為の生活を送り、母親を悲しませ、悲しみのままに母親を死なせてしまった息子の罪の意識と弁解、それが *Les Plaisirs et les Jours* の中で凝視され、記事において正当化され、*la Recherche* に至って「サディズム」として昇華されていくのである。

sadisme, sadique という語は、*la Recherche* 全体を通じて意外に少なく、ヴァントゥイユ嬢（モンジュヴァンでの象徴劇）、ラジェル（新人女優を失脚させるエピソード）、シャルリュス氏（彼の言動、ジュピアンの男娼宿）に用いられているだけである⁽⁹⁾。そして、《Du Côté de chez Swann》におけるヴァントゥイユ嬢の同性愛の光景は《Le Temps retrouvé》でシャルリュス氏に引き継がれ、繰り返され、重なっているともいえる。そこには利害を離れた悦楽の世界が作り出されており、純粹で半ば狂気に近い。この最終章で、話者はシャルリュス氏を通してはっきりとサディストを弁護している。

それにサディストの心の中には、彼がどんなに善良な人間であろうとも、いやむしろ彼が善良であればある程、悪への渴望というものがあって、これは彼とは別の目的をもって行動するよこしまな人間達（たとえ何かははっきりとした理由があつてそうであるとしても）には満たそうなどとは思いをもよらないものなのである）（Ⅲ, p. 827.）

話者の手にかかる時、サディストは悲痛なまでの善人になってしまう。その時、彼の目は驚く程確かである。

Bataille は「悪への渴望もまた善の尺度なのである¹⁰⁾」と言う。ゲルマント公爵の如き絶対的無関心は痛みを伴わない。そしてこの痛みなくしては「サディズム」もあり得ないのである。

作者は、作品前半部ではスワンを通して、後半部ではシャルリュス氏を通し

て、この痛みを描き続けている。スワンの「ストイシズム」(痛みを潜在的状態にしていく態度)は、作品の中で完成をみている。一方、シャルリュス氏の「サディズム」(痛みを楽しむ態度)の描写には、何か未完成なものが感じられる。作者はシャルリュス氏を描ききっていないようである。その描ききれていない部分、描ききれないところに、作者のシャルリュス氏への思い入れが感じられ、心惹かれる。

発端は、ありふれた日常のひどく個人的なこだわりである。しかし、彼の *sensibilité* ゆえにそのこだわりを脱し得ない。彼は見たくないものを逆に凝視している。彼の明晰さは、自己の防御の姿勢をも見抜いている。その防御の姿勢が、作品全体を覆う無関心(間接性)を生み出しているともいえる。

スワン、シャルリュスといった作家の分身達は、実生活ではマイナスの要因としかならないはずのもの(作家が生きたかもしれない生のマイナス面)を、作品の中でプラスに転じて、確かに存在しているのである。

注

- (1) Brunet, Etienne., *Le Vocabulaire de Marcel Proust*, 3 vol, Genève-Paris. Slatkine Champion, 1983, tome II.
- (2) la feinte indifférence, feindre une indifférence, l'air d'indifférence, etc.
- (3) Girard, R., *Mensonge romantique et Vérité romanesque*, 1961, Grasset, Paris.
- (4) Rony, J-A., *Les Passions*, Presse Universitaire de France, 1980.
- (5) Ibid., p. 93.
- (6) Proust, M., *L'Indifférent*, Paris, Gallimard, 1978.
- (7) 彼は作品において、社会的成功者である弟を抹殺し、(既に *Jean Santeuil* において) *la Recherche* における父親の存在も非常に影が薄い。
- (8) 『親殺しの孝心』岩崎力訳 (Painter, George-D., *Marcel Proust, a Biography*, Chatto & Windus, London, Vol. I, 1959 参照)
- (9) Op. cit., *Le Vocabulaire de Marcel Proust*, tome. III.
- (10) Bataille, Georges., *La Littérature et le Mal*, Paris, Gallimard, 1957, p. 162. (『文学と悪』山本功訳)

尚、本文引用については、筑摩書房版、新潮社版、『失われた時を求めて』を参考にした(強調は筆者による)。